

「深い対話的学び」に誘う学生レポートへの返信

－「寺島メソッド」で学んだ看護科「英語コミュニケーションⅠ」の授業分析－

山 田 昇 司

朝日大学 英語研究室

Reply to the Students' Report Leads to "Deep Dialogic Learning"

－ An Analysis of **English Communication I** for Nursing Students Designed by *Terasima Method* －

YAMADA Syouzi

Department of English, Asahi University

Summary

There are three materials that Terasima Method recommends to use for the beginners of English. They are "The Big Turnip", "There's a Hole" and "The House that Jack Built." Through these materials students can intensively learn the basic word order of English : SVO and post-modification. In addition, the materials are very helpful to learn the rhythm of English sounds, because the sentences are very rhythmic. What is better, they get longer little by little by adding new phrases, so students can memorize them without awareness while repeating. In short, they are most excellent stuff in learning not only the sentence grammar but the sound grammar.

In the first semester of 2018 I used the materials in English Communication I (Basic) for nursing students. The main theme of this article is to analyze the students' reports that described what they had learned. I picked up three points which I thought most important.

One is that they said they have recognized the word order of English language for the very first time in their long English-learning career. It means that they have been taught so far just the phrases and sentence patterns without knowing the syntactic structure of English language. One female student expressed her delightful surprise when she first completed English composition by using word order rules consciously, not by just applying sentence patterns.

The next one is that they were surprised at a strange power of rhythm reading. They had a group test of reading aloud, which is needed to read in unison rhythmically, hitting the stressed syllables at the same time. A number of students wrote that rhythm reading made it easier to memorize the sentences. Moreover, they said that this group work was great fun and they really enjoyed the lesson. Some of them even said that it helped them to make friends.

The third one is that they strongly welcomed my test-taking system. They had three kinds of short tests ; one for words and sentences for nursing, and the others for reciting and writing from memory of each above-mentioned material. They could take a retried test as many times as they wished. It means that, if they fail, or even when they are absent, they have a chance for another try. One male student wrote, “I tried until I reached full scores and got a ‘never give up’ spirit”.

I am planning that I will print out my narration part of this thesis to let my students read at the beginning of the second semester. I hope that their learning will be widened and deepened by sharing each others’ thoughts.

<目 次>

1. はじめに — 「授業レポート」分析に与えられた新たな課題
2. 思わず微笑まされた学生の語り — “想定外”で試される教師の「人間力」
3. ワークショップで体験 — 心地よい疲労感を与える「リズムよみ」
4. 新たな寺島仮説の提示 — 「出す」が先、「入れる」はその後
5. 本音を語る「授業レポート」 — 教師はそれにどう答えたらいいのか
6. 後期授業開き、冒頭での語り（1） — 評価する課題、しない課題
7. 後期授業開き、冒頭での語り（2） — 英語力の土台となる「語順力」
8. 後期授業開き、冒頭での語り（3） — 自分の頭で考えて話す英語
9. 後期授業開き、冒頭での語り（4） — 授業に「感動」をもたらすもの
10. 後期授業開き、冒頭での語り（5） — 「リズムよみ」が生み出すもの
11. 後期授業開き、冒頭での語り（6） — 学習者の眼から見た「寺島メソッド」
12. おわりに — 「書くこと」が深める主体的な思考

NOTES

REFERENCES

添付資料

1. はじめに — 「授業レポート」分析に与えられた新たな課題

2018年度前期、看護科1年生対象の「英語コミュニケーション（基礎）」の授業で筆者は英文法の最も基本的な語順「SVO」「後置修飾」を学ぶ三つ「基礎教材」を採用した。これは「まず<幹>を、<枝葉>はその後」というコンセプトを持つ「寺島メソッド」が入門期の教材として推奨するものである。この教材で英語の<幹>である語順を集中的に学ぶことで英会話の基礎力となる「語順力」を養うことができる。（註1）

この授業に対して40人の学生が合計98枚の授業レポートを書いたが、その中には授業への要望が書かれたものがいくつかあった。筆者は後期授業の冒頭で、当初は、それに対する回答だけを行うつもりだった。しかし授業レポートを読み返すうちにそれだけでは不十分だと思った。というのは、学生たちは「作文の手引き」（註2）に導かれて実に豊かで興味深い「学びの記録」を綴っていることにも気づいたからだ。そしてそれを学生同士が交流・共有すれば彼女ら／彼らの学びはさらに深まり、後期「文献購読」の授業への有益な導入にもなると筆者は考えた。

最初は二三のレポートをそのまま紹介するだけで済まそうとも考えたが、その記録を読み込む過程で「やはりこの記録はきちんと分析して文章化しておいた方がいい」と思うようになった。そう思っていた矢先に私が所属する研究所主催の宿泊セミナーで寺島隆吉先生（国際教育総合文化研究所所長、元岐阜大学教授）が新たに提起された仮説を知ることになった。それは「「出す」が先、「入れる」はその後」という理論で、「教育」だけにとどまらず広く「食養」「スポーツ」「心の健康」といった領域までカバーするものであった。

私は寺島メソッド独自の音読方法である「リズムよみ」にも新たな意味づけがされているのに驚くとともに、いま述べた「授業レポート」は学生のストレス（本音）を「出す」ものとも考えられるのではないか、さらにはそれに対して教師が回答することは教師のストレス（本音）を「出す」ことにもなるのではないか、という考えに思い至った。

しかし、もちろん、その回答に学生が納得できなければ双方のストレスはかえって高まることになる。では、そうならないようにするには教師は「何を」「どう」語ったらいいのか。かくして、私の今回の授業レポート分析は単なる「研究論文」ではなく、学生も共感できるような形式と内容も持っているかという課題も与えられることになった。

さて本稿のメインテーマである「授業レポート」分析に入る前に、まずワークショップに先立って行われたキング牧師 DREAM 演説および「リズムよみ／合わせよみ」に関する「理論学習」において講師の寺島先生が何を語り、講座をどう進行していったのかを述べる。そしてそれから当日のワークショップの様子を紹介する。

2. 思わず微笑まされた学生の語り — “想定外” で試される教師の「人間力」

この日行われた寺島先生の講演のテーマは「キング演説の意義、キングの暗殺とは？」「「合わせよみ」とは？」のふたつであった。

前者の話の急所は1999年にテネシー州の民事裁判で「キングは米国の“国家機関”によって暗殺された」という評決があったこと、そしてその判決は米国メディアから黙殺され、現在もほとんどの米国人が知らないという事実である。寺島先生はこれまでたびたび英語教師には「英語読み」の“アメリカ知らず”が多いと指摘されてきたが、キング演説 DREAM をワークショップで取り上げるにあたって知っておくべき背景知識としてこの話をされたのである。ちなみに今年はキング暗殺から50年目にあたる。

後者のテーマについては、まず寺島 (1997b) の第1部第1章および第2章を輪読してキング DREAM 演説でどんな学力をつけるのかを学んでいった。その中で私が黄色の蛍光マーカーをいちばんたくさん引いたのは24-25頁のところだった。「SHADOWING ができるということは、今まで単なる音の連続に過ぎなかったものに「切れ目」が入り、いわば頭の中で音を活字の状態で見られるようになったということ」、「あとに残されているのは、頭の中で文字化された文を直読直解して^{くだり}いだけ」、そのためには「長文を直読直解・速読速解できる力をつける必要がある」という行であったが、その流れの中のどこに「リズムよみ」「合わせよみ」を位置づけるのかがわかった。

その答えは第1段階の前半部分「今まで単なる音の連続に過ぎなかったものに「切れ目」が入る段階に到達する」である。もちろん「リズムよみ」「合わせよみ」のどちらでも英文を見ているわけだから音を活字化するという負荷はない。だから直読直解・速読速解の力がまだ充分でない学習者にもやれる課題になるのだ。ただ「合わせよみ」は自分のスピードで読むことができない。音を聞きながらその音を追いかけてよむ必要がある分「リズムよみ」より難しい。だから「合わせよみ」の実態は「合わせよみ／聞き」、もっと正確に表現すれば「聞き／合わせよみ」と命名したほうがいいのかもかもしれない。

この輪読（＋随時に寺島先生のコメント）がこの後に行う「リズムよみ」「合わせよみ」に向けて参加者の「頭」を ready にしたと言うならば、そのあとの同書の第3部にある「学生レポート」輪読は参加者の「心」を ready にしたと言ってもいいかもしれない。というのは、ここには学生たちの行動と気持ちが正直に綴られていて思わず微笑んでしまう箇所がいくつもあったからだ。学習者と教授者との信頼関係が築かれている証左であろう。その一部を紹介する。

しかし英語は必修科目です。このまま休み続ける訳にはいきません。次の週、嫌々ながら

授業に出てみました。すると、やってる、やってる。大小のグループがあちこちで練習しています。／僕は先生に助けを求めました。「あのう、先週休んじゃったんですけど。」「そのグループに入れ。」こうして指定されたグループには2人の同じ先週休んだバカ者達がいきました。(p.144)

「リズムよみ」を先生の前で発表した後、グループの1人が、先生に聞こえているのも忘れて、「この授業の先生って、かなりたち悪いそうだから」と言ったことがあります。僕はヤバイと思ったのですが、先生はキッとこっちを見るや、ニヤッと笑い出し、また他のグループの「リズムよみ」を素知らぬ感じで聞いていました。このとき僕は思いました。「おっ結構話の分かる先生じゃないか」と。「リズムよみ」が楽しくなり始めたのもこの時期からでした。(p.145)

当日に輪読しているときはただ「おもしろい場面だな」と思っただけだったのだが、後者の作文をいまもう一度読み直してみると、この「キッと見る→ニッと笑う」という表情の瞬時の切り替えは神業に思える。というのは「戒め」と「赦し」を同時に行っているからだ。私にはとても真似ができない。この技は寺島メソッドの教育原理にある言葉を使うと「叱る」「ゆるす」の実践例になるのであろうか。いずれにしても、教師の人間力（あるいは演技力）が試される場面であると思った。

さてここまでで当日のレクチャーの報告は終わるが、寺島先生は最後に「あとで寺島(2002)の第2部第4章も読んで見て下さい。「合わせよみ」についてさらに別の観点からの考察が書いてあります」と言われた。そこで帰宅後にその数頁を読んでみた。そこには「合わせよみテスト」実施の手順や評価の考え方について書かれていたが、とりわけ興味深かったのはご自身も「効果が出すぎて続けられない「寺島メソッド」」を経験されていたことが分かったことだ。

どういうことかというと「自分でもやれそうだ」「失敗してもやり直しOK」というテストのやり方に挑戦意欲をかきたてられて、発表希望者が列をなし、最後は時間外勤務という「嬉しい悲鳴」だが、「繰り返したくない失敗」になった実践例が書かれていたのである。

そこを読み終えてから第2部の目次を見てみると「「量」が意欲と希望を生み出す」という理論が「聴く」だけでなく「読む」「書く」「話す」についても論じられていることが分かり、他章も読みたくなった。というのは、私自身が看護学科で後期開講予定の「文献購読」の授業における課題のひとつに「エッセイ・ライティング」が入っておりその評価基準をどう組み立てるかをちょうど考えていたところだったからだ。その部分を読んだおかげで後期授業の構想が一気に固まってきた。(註3)

3. ワークショップで体験 — 心地よい疲労感を与える「リズムよみ」

さて本節では前節で述べた理論学習の後に実施された「リズムよみ」と「合わせよみ」のワークショップの様子を紹介する。なお、寺島メソッドの音読指導には三つのステップがある。「リズムよみ」「通しよみ」「合わせよみ／表現よみ」であるが、キング DREAM 演説は「リズムよみ」「通しよみ」「合わせよみ」の方の典型教材とされている。

参加者はペア2組とトリオの三つのグループに分かれた。使用した「リズムよみプリント」は寺島美紀子先生（本学教授）が実際に授業で使っておられるもので、英文の上には「リズム記号」、英文には立ち止まり位置を示す縦線、英文直下には読み仮名と縦線で区切られた部分の立ち止まり訳が付されている。

参加者はまず全員で最初の1頁分（5段落）を講師（山田）のあとについて「リズムよみ」し、それからグループで段落単位の「リズムよみテスト」に挑戦した。休憩時間を挟んでおよそ90分で最初のグループが全56段落を読了、次の「通しよみ」に入った。これは全段落を一気に通して読みきる「リズムよみ・グループテスト」である。

最初の3人グループが「通しよみ」を完了し、残りの2グループが合同で「通しよみ」テストを受けている途中で寺島先生から「そこまでで終了。残り時間25分で「合わせよみ」を行います」との指示があった。全員が机の前に立ちキング牧師の音声から1秒遅れて英文を読んでいく課題である。

読み損じたり音声より先に進むと失格になり順に着席していく。私自身も東京での研究会以来20年ぶりにこのテストに挑戦した。途中で、何か所かでやや危ういところがあったが、なんとか16分のキング演説の最後まで辿り着いた。

以前は途中で失敗してやり直したことを鮮明に覚えているので、そのときに比べると少しは進歩しているようだ。このときの様子は寺島（2002：109-115）の2カ所に記載があるが、そのうちのひとつはどうも私の描写ではないかと推察される。

会場のエアコンはよく効くので私はいつも上着を用意するのだが、この集中レッスンが進むにつれてその効きが悪くなったと思うほどの熱気が部屋に満ちてきた。講師の一人としてリズムよみテストを行っていた私自身もリズムで自然に体が動きかつまた声も出てしまうのでいつの間にか上気し、最後は心地よい疲労感を参加者全員と共有することになった。

4. 新たな寺島仮説の提示 — 「出す」が先、「入れる」はその後

この「心地よい疲労感」は寺島メソッドの実践者がしばしば経験することであるが、今回のセミナーで寺島先生はその心地よさをもたらす「リズムよみ」に以下のような新たな意味づけ

を与えた。

「唄うこと」あるいは「リズムよみ」などは、「口」という「排出排毒器官」を使ってストレスを「吐き出す」ことができるという点で、心の健康にとって大いに有効である。

「歌う」ではなく「唄う」となっているところがなかなか渋い。「歌」にも確かに「口」はあるが、「唄」の方の「口」の方が大きい。こちらの方がよりたくさんのストレスを吐き出せる。寺島造語法の真骨頂を再び見た気がするが、それはさておき、この定義は以下の「食養・教育・スポーツ・心の健康」に関する表から導き出されたものである。

	出すこと、出させること	入れること、詰め込むこと
食 養	排泄（排便排尿）、湿疹発汗発熱	粗食少食、玄米菜食、腹八分目
教 育	疑問や知的好奇心を「引き出す」 自信と将来への夢を「引き出す」	「入れる」のは「水源地」のみ 知識の「詰め込み」は消化不良の素
スポーツ	水泳もテニスも、その他すべて、 息を「吐く」ことが出発点	水泳で「吐く」ことができれば「吸う」 ことは無意識に。腰痛は「吸う」とき。
心の健康	ストレスをどう「吐き出す」か 不満をどう「吐き出させる」か	管理・命令・服従は、否応なく「受け 入れる」「受け入れさせる」こと

おそらくこの仮説は後に寺島先生の「私の教育原理」第9章「教育の技術と思想」に追記されることになるものだろうが、今回の寺島先生の講座「庶民と教員の「健康で文化的な最低限の生活」を守るために」では4枚のレジュメと8枚の資料を用いてこの仮説が生まれるまでの経緯が詳しく語られた。

私の記憶をたよりに思い起こすと、研究所主催セミナーのテーマにはじめて「食と健康」が取り上げられたのは3年ほど前で、そのときに船瀬俊介『3日食べなきゃ、7割治る!』、橋本敬三『体の設計にミスはない—操体法の原理』といった書籍が紹介された。今回の講座では、その原点となるのはそこから遡ること30年、寺島先生が定時制高校に赴任された年に遭遇された「痛風体験」であることが明らかにされた。

この3年間に寺島先生と美紀子先生が提起された「食と健康」に関する話から私は多くのことを学んできた。「朝食抜き」「白米から玄米」「肉食減らし」「ヨーグルトから豆乳グルト」を実践し、最近では「アロエ」も生活に取り入れているが、快便、体重減少、吹き出物や口内炎の消失、痔瘻からの解放、花粉症軽減といった変化が自分の体に起こっている。

また長崎被爆医師・秋月辰一郎のことを知ったことも強く印象に残っている。というのは「たっぷりの塩で握った玄米おにぎりと濃い味噌汁が放射能を Detox した」という驚くべき事実に関し、全く先の見えない絶望の原発事故にも一縷の希望の光りが見えた気がしたからだ。

今回の話ではマクロビの創始者・桜沢如一の孫弟子に当たる田中愛子さん（1925-2018）の話が衝撃的だった。彼女は病気を治すために摂る玄米だけの「七号食」を実行させるために自らも寝食を共にしたという。とりわけ驚いたのは、彼女にはその食事が辛くて逃げ出した人の居場所が分かったり、電車の中でも目の前にいる人がどんな食事をしているのかが見えるという話だった。これこそ「腹四分目で神に近づく」だ。ちなみに、このフレーズは「腹八分目で医者いらず、腹六分目で老いを忘れる」の後に続く言葉である。

私自身の日常ははまだ「腹八分目」くらいであるが、毎日「出す」ことによって体調が良い方向に向かっていることは確かに思える。さて、次節からは最近の自分自身の授業を例に取り上げて、それを寺島先生が上掲表で提起した「教育における「出す」「引き出す」という観点から考察してみたい。

5. 本音を語る「授業レポート」— 教師はそれにどう答えたらいいのか

今回のセミナーの最終日に私は「看護学科学生からみた『魔法の英語』」というテーマで報告を行った。これは2018年前期の授業で自学自習用として与えたテキスト『魔法の英語』（寺島・寺島美2001）に学生たちがどのように取り組んだのかを10人の授業レポートで紹介したものであったが、最後に紹介した一人の女子学生から出された「教師に対する要望」にどう応えたらいいのかについて私は悩んでいた。彼女は「授業でほとんど扱わない課題としては量が多すぎる」という不満を述べていたのだ。

それへの回答は先の研究所掲示板への投稿で書いたように「後半3分の1は評価対象とせず自主学習とする」「テキストを終了してさらに学びたい人は冒頭5頁の英文の記号づけに挑戦させる」というものだったが、その他の要望も含めて後期の授業開きで学生に回答するつもりだった。そしてこのような要望や不満が書かれた授業レポートについて、私は「学生たちが自分の正直な気持ちを偽らずに書いてくれた」という点で大きな価値があると思っていた。

というのは、自分の名を明かして記述する場合は教師に対して批判的意見を書くことはとても勇気のいる行為だからだ。大半の学生はそう思っているとしてもその意見を表明することにはため

らいを感じるものだ。だから彼女のように感じている学生は他にも何人かいると教師は考えたほうがいい。事実、テキスト名は挙げていないが「もうひとつのクラスとの授業量の差を考えてほしい。宿題もあまりなく、レポートもありませんでした」といった苦情がいくつもあった。

そして今回、寺島先生が提起された仮説を聞いて、この「授業レポート」（より焦点化して言えば、そこに掲載されている「作文の手引き」なのだが）は学習者が自分のストレスを「吐き出す」、教師の側から言えば学習者の本音を「引き出す」ためのきわめて有効な手段にもなっていることに気づかされた。

そう考えながら、もう一度、先掲の定義を見てみると、この例は「教育」ではなくむしろ「心の健康」におけるストレスの解放ではないかとも思えてくるが、いずれにしても学習者と教師の両方の心が安らかでない限り「よい教育」ができないのは自明なのだから、そのどちらにも関わっていると考えておいてもよいであろう。

さて、授業レポートが学習者のストレスを「出す」ものであるならば、それに対して誠実かつ真正面から回答することは教師のストレスを「出す」ことになるであろう。ただ、その回答は「否応なく受け入れさせる」ものではなく、学生が理論的にも感情的にも納得できるものでなくてはならない。では、そのために教師は「何を」「どう」語ったらいいのか。

次節からは後期の授業開きに私がおこなう予定の回答をあらかじめ文字化して自分の頭の中を整理してみたい。よって次節からの記述には「常体」ではなく「敬体」を採用する。

6. 後期授業開き、冒頭での語り（1）— 評価する課題、しない課題

皆さん、久しぶりですね。後期の「文献購読」も山田が担当しますのでよろしく。さて、その教材を配る前にまず、みんなが前期末に書いてくれた授業レポートを返却します。（番号順になっているのでグループ毎に返却）

得点は15点満点で、1枚超えたら8点、2枚超えたら9点、3枚超えたら11点というふうに機械的に付けてあります。数字の右肩に^{プラス}＋がある人は教師の主観による加算でその個数だけ1点ずつ加算されます。前期の評定は各種の課題点にこの点数を加えて出していますので、それに疑問のある人は後で申し出て下さい。

このレポートは40人の人が提出しました。ひとりだけコピペの人がいて残念でしたが、残りの39本のレポートはマーカーと付箋を手じゅくりと読ませてもらいました。読みながら、どの人も自分の気持ちを正直に包み隠さずに語ってくれていることが伝わってきました。どうしてそう感じたかという、授業への要望や不満もその中で書かれていたからです。次に代表的なものをふたつ紹介します。

先生の授業に対しての要望は、もう一つのクラスとの授業量の差を考えてほしいです。もう一つのクラスは、宿題もあまりなく、レポートもありませんでした。また、ノートに書いてくる宿題の量が多すぎて大変でした。(KNさん)

視写と『魔法の英語』には苦労した。量が多すぎた。毎回もう少し少なくていいのではないかと思いつつコツコツとやっていた。視写は授業でやる暗写テストに繋がると思うと頑張る事ができたが、『魔法の英語』は授業では使わないしテストがあるわけでもない。なのにこの量をこなさなければならぬのか不思議でしかたなかった。(Tさん)

大学の授業は本来ならシラバスの内容をみて学生が自由に選択するものだと思いますが、諸般の事情でそれができません。学生に授業（教師）を選択する権利がないのであれば、他のクラスと同じくらいの課題量にしてほしいという気持ちを持つのは当然です。

ただこの要求は私に「なるほどもっともな指摘だ」と考えさせる正当性もありました。というのは、私自身も最後の「三教材プレゼン」を取りやめて「語順テスト」の再試に振りかえたこともあったし、他の場面でも少しゆとりがないと感じるときがあったからです。例えば、シラバス上では各教材の最後になるコマ（3,7,11時間目）において「暗写テスト」「終了者は補助テキスト」となっていますが、実際は前時の「暗唱テスト」の続きが入り込んできて、そうはなっていませんでした。

これまでにこの三教材を教えた他学部との違い（クラス人数や「看護表現小テスト」の実施など）を勘案して課題量を検討しておく必要があったと思います。ただ、前期の成績SABC分布比率は結果的にもうひとつのクラスとほぼ同じになっていますので皆さんが不利になることはありませんでした。

後期の授業は当面は当初のシラバスの通りに進めますが、いま紹介した意見に沿えるように工夫したいと思っています。初めての教材ですので「進めながら微調整」になると思います。よって意見があれば早めに聞かせてください。なお、皆さんは全員この「英語コミュニケーションⅠ（基礎）」の授業に合格していますので関係ありませんが、後輩のために次年度は次のような改善を行うつもりです。

1. 補助テキストの『魔法の英語』については後期の「文献購読」の予習として引き続き使用するが、評価（10%）に入れるのはLesson 10までとし、残りの4課は自主学習とする。なお、さらに深く学びたいと思う人には「テキスト冒頭5頁にある英文に自分で記号づけする」という課題を提示する。但し、こちらも評価には入れない。

2. 基礎3教材 HOLE、HOUSE、TURNIP の視写はそれぞれ5回→4回、3回→2回、5回→3回に減じる。行数では順に、24行×4=96行、72行×2=144行、35行×3=105行になる。配点は10%で同じ。

3. HOUSE、TURNIP の暗唱テストについては、再挑戦の場合は間違えた段落から再開することができる。但し英文のストーリー性を生かすために第1連から始める。

3つめの改良点「再挑戦は間違えたところから」については、ふたつめの教材 HOUSE の終わったあとに回収した授業メモ（リアクション・ペーパー）の中ですでに要望が出ていたものです。それで TURNIP の暗唱テストについては全体を7分割して「どこから始めてもよい」「合格は段落毎に出す」としました。

ただ「どこから始めてもよい」については上記のように改めます。というのは、そうしないと原文の持つ「物語性」を損なうことになるからです。この話は小学校の教科書に出てくるほど有名なものですが、どうして登場人物がだんだん力の小さいものになっていくのでしょうか。最後にもっとも力の弱いネズミが出てきてカブが抜けたことにはどんな意味が込められているのでしょうか。単純なストーリーですが実は深い意味が込められています。みなさんも考えてみてください。

話を元にもどしますと、次年度は上掲のような3点で手直しをしますが、ただ私はいまの自分の教え方全体の枠組みを変えるつもりはありません。なぜなら、「全ては教えない」「まず幹を、枝葉は後」「記号づけプリント」「リズムよみグループテスト」「評価は自己評価」などは私が長年の試行錯誤を経てやっと辿り着いたものだからです。

この教え方を皆さんがどのように評価しているかについては後で詳しく述べますが、それに先立って、ひとつ誤解を訂正しておきます。授業レポートの中でこの教え方を「山田メソッド」と呼んでいる人がいたからです。この英語教授法の名称は「寺島メソッド」です。詳しく知りたい人は最近『寺島メソッド 英語アクティブ・ラーニング』という本が出版されていますので見てみて下さい。

また私の長年の試行錯誤の歩みをまとめた本もあります。高校で教えていた28年間の記録は『授業は発見だ』（2005）に、大学に来てから8年間の記録は『英語教育が甦えるとき』（2014）という本にまとめてあります。看護師という専門的な職業も同じだと思いますが、教師という職業もそこそこの一人前の仕事ができるまでにはいろいろな失敗や苦労があるものです。ですからこの2冊の本はそんな観点からみるとおもしろいかもしれませんね。なお、いま紹介した本はどれも図書館に入っています。

7. 後期授業開き、冒頭での語り（2）— 英語力の土台となる「語順力」

さて、補助テキスト『魔法の英語』については次のような意見もあったので参考までに紹介します。ひとつめは、補助テキストを授業の復習として活用したというものです。

大学で受けている他の授業との違いのひとつは補助テキストがあるという点だ。他の授業では教科書しか使わない授業が多い。この補助テキストがあって授業の復習が手軽にできるのでとてもよかった。他の授業では復習しなかったり、どう復習すればいいのか分からなかったからだ。(K 君)

私がこの作文に興味深く思った理由は、授業では「センマルセン」と「後置修飾」という語順だけしかやっていないのに、K 君が「この補助テキストは授業の復習になった」と書いている点です。補助テキストには私が教えない様々な文法事項や基本語順ではない英文がたくさん出てくるのに、どうして授業の「復習」になるのかという疑問を持ったのです。しかし、次に紹介する「英語を学ぶ楽しさ」と題した作文を読んで理解できました。

簡単と見られる基礎を1から学ぶことは能力を高めるために必要不可欠となってくる。例えば、ピラミッドは土台がしっかりと硬く固められているため、高く石を積み上げていくことができる。そのような考えと同じで、基礎となる土台がしっかりしていなければ、高い英語能力を学んだところで身につけることは不可能である。(IR さん)

学力の構造をピラミッドに喩えて説明したところは見事だと感心しました。基本の語順をしっかり押さえたからこそ、既習の知識がそれに繋がってよりよく理解できるようになったのです。バラバラなものが体系化されたとも言えるかもしれません。

そういえば、「ピラミッド」という言葉は、別の意味でしたが、私も最後の授業のときに使いましたね。授業レポートを書く意義について「自分が学んだことを文字化して客観化できれば他の人に教えることができる。暗記したものは消えるが、そうやって学んだものは消えない」と話したときに、Learning Pyramidの図を紹介しました。「Teach Others」はピラミッドのいちばん下の土台に位置づけられて学習定着率が最も高い活動であるとみなされていました。

話が少し逸れましたが、次に紹介する作文も英語の土台をしっかりと築くことの大切さを語っています。心情の変化がそのままに綴られているところがいいですね。

今までに〈問1〉の段階は踏まずに、〈問2〉の段階もよっぽど複雑な文章が出されたときくらいしかやってこなかったのも、とても戸惑いを感じたし、英語は高校まででしっかり学習してきたつもりであったために「くだらない」と思っていました。しかし、学習を進めていくうちに、何となく訳していた部分の理解が深まり、英語のいろはが分かったような気がしました。また、この教材にもっと早くに出会い、中学の学習に取り入れられていたら英語に対する苦手意識が薄くなっていたのではないかと思います。(KSさん)

8. 後期授業開き、冒頭での語り(3) — 自分の頭で考えて話す英語

この文でKSさんは「何となく訳していた部分の理解が深まり、英語のいろはが分かったような気がしました」と書いていますが、同じようなことを書いている人が他にも何人もいて少し驚きました。以下にその作文を紹介します。(下線は山田)

今までは何を理解すればいいかわからず、そのまま英文を覚えていた。それは、英語そのものを理解していない為しばらくすると忘れてしまう。この英語をとおして英語に大事なものが何なのか理解することができた。(AYさん)

今まで小学校三年生頃から9年間ほど英語の授業を受けてきたわけだが、今までとは全く異なった授業形式で、とても新鮮に感じた。今までは、ペア活動での会話メインばかりだったので、決まり切った定型文でお互い話すだけだったが、今回の講義では自分の頭で覚えて考えて、英語を使っていくという形だったので、とても私の向上につながったと思う。(AAさん)

私は高校までの英語はテストの点数はとれるけど、文の構造など深く考えていなかったし、ただ何となく理解していただけだったり、問題の答えを完全に覚えてしまっただけだった。あまり意味のない勉強法をしていたため、英語は苦手でした。しかし、今回の授業を通して、英語と日本語との違いやリズムに注目しながら取り組んだ、文の構成や語順を意識しながら学ぶことができたし、何より楽しく学べた。自分で繰り返しやってみるということによって、少しずつ知らない間に定着してきて、できるようになっていくのが楽しかった。(SHさん)

AAさんも書いているように、昨今の流行の授業は単語やフレーズを覚えて会話するのが主体となっていて英文の仕組みを学ぶことが疎かにされる傾向が強くなります。文の構造を学ば

ずに丸暗記しているから忘れてらそれでお終いになるのです。AYさんの証言のとおりです。また仮に「決まり切った定型文」を覚えていたとしても、それは特定のその場面でしか使えません。

一方で、授業でやった「絵を見ながら単語の順序を考えながら言った英文」は頭の中に「センマルセン」や「後置修飾」という語順が残ります。この文の仕組みを知っていれば、後は単語を調べればいだけなので自分の言いたいことが言えます。つまり、語順をしっかりと学ぶことは後で使える「生きた基礎力」となるのです。そしてこのテキスト『魔法の英語』は英文の語順と構造を日本語を介して何度も繰り返かえて学ぶように作られている“優れもの”なのです。

KSさんは「このテキストにもっと早くに出会いたかった」とも書いていたのでこの話も紹介したくなりました。『魔法の英語』に70歳になって初めて出会った女性の話です。この8月に私が所属する研究所のセミナーで話をされました。彼女はお孫さんがこの4月に小学校の三年生になって英語を学び始めることがきっかけとなってこのテキストに取り組んだのですが、おもしろくなって1日7時間やることもあったそうです。ご主人は英語の先生で「問1と問2だけやればいから」とアドバイスされたのですが、発展問題にも挑戦されました。ご主人からは「ある朝の会話が“キリマンジャロの話の主題は何でしょうね”ということもあった」というエピソードも紹介されました。そして今はこのテキストの3回目に取り組んでおられます。

その女性は「語順訳→立ち止まり訳」について次のように話されました。「空欄をひとつ、ひとつ、順番に穴埋めして行って、ときどき立ち止まって和訳を考えるなんて、人の生き方と似ていますね」。なんと味わい深い言葉でしょうか。長い人生の間に幾多の苦楽を味わってきた人にしか語れない言葉だと思いませんか。私は学ぶことは本来はこんなふうに発見や感動があって、おもしろいものなのだと改めて気づかされました。

9. 後期授業開き、冒頭での語り（4）— 授業に「感動」をもたらすもの

ところがみんなの中にもレポートの中で「感動」という言葉を使った人がいて私はとても感激しました。そのひとりがIMさんです。彼女の作文の第4章第1節「成長記録」からの抜粋です。（下線は山田）

私が一番成長したと感じることは、英語の学習目標である「英語の幹を学ぶ」ということが実現できたことである。特にそのことを実感したのは授業の最後である語順テストでいい点がとれたことだった。最初は大きな不安があった。もともと英語は苦手な分野であり、英作ともなると余計に脳内が混乱していた。しかし、実際に語順テストを行って、自分で

もその出来映えに感動を覚えた。高校の時のような暗記で覚えるのではなく、なぜ英語がその語順になるのか、どのように並べ替えるのか、英訳するのか、すんなりとペンが動いたのである。そしてテスト返却の時のあの安心感は格別だった。テストのミスもそこまで酷い間違いはしておらず、よくみれば直せそうな問題であったり、写し間違いなどといったいわゆる凡ミスで点を落としていた。そんなことで落としてしまうのはもったいないなと、悔しい思いもしたのだが、そのこと以上に、語順テストの最終問題の英作ができていたことに喜びを感じていた。

下線部「すんなりとペンが…」の一節からはIMさんが「暗記した知識を吐き出す」のではなく「理解したことを活用している」、つまり「頭脳を能動的に働かせている」様子がよく伝わってきますね。

もうひとりはお君です。彼の作文には「まずは」「次に」「また」といった文章標識が巧みに挿入されてはいたのですが、1ページが改行なしでびっしり埋められていました。でもそんなことは気にもならず一気に読ませてしまう内容でした。全文を紹介したいところですが、さわりのところだけを以下に載せます。

次に視写だ。視写はどれだけやるのも自分次第との指示があったため、すべてやると決め、自分なりにやりきることができた。先生は書いていけば手が覚えると言葉を漏らしていたが、本当にその通りだと思った。書いているときは無意識に単語をつぶやき、文を小声で言ってしまう。そのせいで周りに迷惑をかけていたことが度々あったが、そのおかげもあって覚えることが出来たと思う。(中略) 私が一番これはすごいと感動したのは、テストが何回も挑戦できることだ。本当にこれには驚いた。テストが何度もできるということは、満点をとる機会がいくらでもあるということだから自分から進んで勉強してしまう。この制度は今後も続けてほしいと思う。(後略)

「テストのやりかた」についてはお君の他に何人もの人が同様の感想を授業レポートの中で述べています。以下に代表的なものをいくつか紹介します。(下線は山田)

すべてのテストでは、再試を受けても良い方の点数になることでリラックスして覚えることが出来たんじゃないかと思っています。(IAさん)

そして、もう1つ大きく違う点がある。それは小テストを何度も繰り返し受け直すことが出来るという点だ。今までは1回だけテストを受け、返ってきた問題の間違いを直すこと

もなくそこで終わっていた。しかし、今回の授業では、何度も受け直すことが出来る。それは自分のペースで正確に覚え、納得するまでテストを受けることができるのだ。(IRさん)

私はテストを何度も受けられる制度が良いと思う。一発勝負ではなく何度も自分の力を計れるというのはとてもありがたい。そのため、テストを何度も受けられる制度は今後も続けてほしい。(IKさん)

暗写で一番心に残っているのはHOUSEである。3つの文の中で一番書く量が多かった。そのためなかなか覚えられず苦勞した。でも、何度も何度も書くことで覚えることができた。再試験のメリットとして1回よりも何度も書く方が頭に入るといことだ。合格するまであきらめずに書き続けてよかったと思う。(KMさん)

私は、英語の小テストで苦勞しました。英語の根本的な組み立ての方法や単語を覚えるのがとても苦手だったので苦勞しました。なのでしっかりと文法を暗記して満点が取れるようにしました。何回でも挑戦可能だったので満点が取れるまで何回も挑戦しました。そうすることで、私の苦手だった小テストを乗り切ってきました。(申略)そして何度も挑戦することの大切さを学ぶことができました。(S君)

この「何回でも挑戦できる」というテスト方法は寺島メソッドが提唱する評価法のひとつで「学力」というよりは学習者の「やる気」「意欲」を評価するものです。この評価方法の背景には「評価というものは、教師が生徒をランクづけする手段ではなく、本来は生徒が自分自身につけるものである」という考え方があります。それゆえ、学習者がつねに自分の点数を計算できるようにするためにシラバスで課題と配点を公開してあるのです。

いま「学力」よりは「意欲」を評価すると言いましたが、不思議なもので、このシステムだと、いま紹介した作文にもあるように「自分のペースで」できるから「何度も頑張ろう」、さらには「満点が取れるまで」やろうという気持ちが生まれてきて、結果的に「学力」もつくことになるのです。私がこの授業でやるテストは「学力を測るテスト」ではなくて「学力をつけるテスト」だと言ったのはこういうことなのです。後期の「文献購読」では授業で読んだ英文に記号づけする小テストを10回実施する予定ですのでまた同じようにならば「本格的な英文」でも自分で構造をとらえながら和訳する力をつけてほしいと願っています。

このことも話しておきましょう。実を言うと私は最初このテスト方式をこのクラスでやれるかどうか自信がありませんでした。不安だったのです。というのは、クラスの人数が多くて教

師がひとりの力で小テストを再試も含めて配布、回収、採点、記帳、返却の全てをするのは無理だと思ったからです。

そこで「これは学生の力を借りるしかない」と判断して1回目は「相互採点」「グループ記帳・回収」、再試はすきま時間に「各自受験」「自己（相互）採点」という手法を採用したのですが、みんなが真面目にテストに取り組んで協力してくれたおかげで「何度でも受験」がうまく機能しました。授業というものは教師と学生が共同でつくるものだということをしみじみ実感させられたこの4ヶ月でした。

ただ、暗写テストの採点はできるだけ教師がするようにしていました。というのは癖字を直したり、小さな綴りのミスを見つけるのはこれまでの経験で意外と難しいことを知っていたからです。

10. 後期授業開き、冒頭での語り（5）—「リズムよみ」が生み出すもの

さて次は寺島メソッドが推奨する音読方法である「リズムよみ」「リズム打ち」をみんながどのように受け止めたのかを見てみます。何人もの人がこのユニークな音読方法に最初は戸惑いながらも受け入れてその不思議な力に驚いたり、グループで挑戦した「リズムよみテスト」の中では協同で学ぶ楽しさを見つけたと語っていました。最初にその不思議な力に驚いたことを綴った作文を2つ紹介します。（下線は山田）

英語の授業の中で先生は英語はリズムで覚えると述べていたことがある。私はこの言葉を信じ、自宅で復習する際にもリズム打ちをしながら発声練習を行ったところ、自分で言うのもおかしいが覚えが早かった。普段私はノートに何度も書いて覚えていたが、ノートに書いたのは2回であとはリズム打ちに変えてみたところ効果は大きかったのである。リズムで覚えるとふいにその英語が出てきたり、癖で歌を口ずさんだりすることがあった。変えたことはちょっとだが、ここまで変わるのだと分かったら、今までの自分の勉強方法がいかに面倒なものであったのかと痛感した。（Uさん）

私は今までリズム読みというものをやったことがなく初めての経験だった。リズム読みでは、特に、音の連結を学ぶことができた。There's a を「ゼアズ ア」と読むのではなく「ゼアザ」と読むことや、frog on を「フロゴン」と読むこと、bump on を「バンボン」など、音が連結することで発音が少し変わってくるということが分かった。最初の HOLE で音の連結を学んだことで、HOUSE や TURNIP でも自然と音の連結ができるようになった。また、自分の知らない単語もたくさん出てきて、それもリズム読みすることで覚え

ることができた。特にHOUSEのThis is the man all tattered and torn that kissed the maiden all forlorn that milked the cow with the crumpled hornの部分が難しかった。リズム打ちをしながら英文を読むことで、リズムに乗りながらすらすらと英文が出てくるようになり、ただ読むだけではなく、リズム打ちしながら読むことがとても重要なのだと感じた。(Oさん)

次の作文は「リズムよみグループテスト」の“楽しさ”を語った作文です。この「ともに学びともに成長する喜び」はパソコンの画面に向かって行うe-learningやタブレットを介しての学習では決して得られないものです。

私は自分がこれまでに受けた授業で、英語というものは一人で文法を覚えたり単語を覚えたりして英語の能力を高めていくものだと思っていた。しかしこの授業は、主にグループワークで英語の授業をしていた。このグループワーク中心の授業を実際に受けてみて、この方が他の人たちと相談したり教え合ったりできるためいいと思う。またそれ以外にもグループワークするメリットがある。それは授業が楽しかったということだ。他の人と話しながら授業を受けることで、リラックスして授業を受けることができるし、それによって集中して学習できると思う。(K君)

私はこの講義を通して、発音が少しカタコトではなくなったのではないかと思う。高校までは、前にも述べたとおり、発音についてはただ書いてある単語を発音してただで舌の動かし方など考えたことがなかった。しかし、この講義で読みを何回もすることで、発音の仕方についてもっと追求したくなり、特にRとLの舌の巻き方について意識したりthの時も気をつけたことで、暗唱の時に高校のときより発音がよくなったのではないかと感じた。またほとんどがグループ行動だったため、グループとの団結力も高まったし、まだ仲良くなかった子たちともこの講義を通して仲良くなれて、英語の授業の前にまだなじめれていなかった学校生活にもなじめられる空間だった。／ほかの授業は先生の話聞くだけであるため、ノートを取らないと頭に入ってこないが、この講義は声に出すことが多いため、口と手で勉強ができ、普通の授業よりもとても頭に入った。また、前にも述べたようにグループ行動があり、毎回グループの子たちと話することで普通の授業よりも早く感じて、この講義の時間がとても楽しみだった。(OKさん)

少し付言しますと、私はOKさんの作文の前半部分もとても興味深く読みました。というのは、私は授業では「強弱リズム」、それによって自然に生まれる「音の連結・脱落」しか教え

たことがないのに彼女は R と L の発音の違いとか th の舌の位置について気をつけて発音したくなったと述べているからです。

授業で学習者に「あれもこれも」教えなかったからこそ、つまり基本の「いろは」だけをしっかりと教えたがゆえに、難しい子音の発音にも挑戦しようとする意欲が引き出されたのではないかと私は思います。ちなみに education は「教育」と訳されていますが、その語源はラテン語で e (x)「外へ」duce「出す」から来ていると言われています。つまり education は「教える」のではなく「子どもの持っているものを引き出す」ということになります。

11. 後期授業開き、冒頭での語り（6）— 学習者の眼から見た「寺島メソッド」

さていよいよ私の話も最後になります。ここまでで紹介できなかった作文でどうしてもみんなと共有しておきたいものがまだいくつかありますので以下に掲載します。

最初に紹介する作文は今回の授業が「受け身の授業とは正反対」になっていると評価しています。数年前から文科省は大学の授業に「アクティブ・ラーニング」を取り入れることを推奨し始めましたが、寺島メソッドの創始者である寺島隆吉氏（元・岐阜大学教授）と奥様の美紀子先生（本学教授）はすでに30年以上前から「生徒の能動的な授業への参加」を仕組んで実践してこられました。私はその研究会に当時から参加して学んできたので SN さんが私の授業をそう評価してくれたことをとても嬉しく思いました。

これまで中学や高校で受けた授業との違いについて言うとすれば、ほぼすべてであると私は考える。中学や高校の授業はいわゆる「受け身」の授業であり、先生が黒板に教科書の英文を書き、部分訳や全文が訳されていくのをただノートに写すだけだった。しかし、今回の授業は自分たちから積極的に参加しないと始まらないので、受け身の授業とは180度違う授業だと感じた。HOLE の一番最初の授業の時に、先生が歌に合わせ、絵を見ながら英文を言っているのを見て衝撃を受けた。しかし、授業を進めていくにつれて、自分も何も見なくてもリズムを取りながら暗写ができるようになり、成長を感じられた。

次の作文では KR さんはこの授業を「五感を働かせる学び方」と述べていますが、この表現は私たちの研究会でもあまり聞いたことがない新鮮なとらえ方なので感心しました。

グループで暗唱テストがある前の授業でどこまでテストを受けるか決めていたので、視写と組み合わせて暗唱テストまでに覚えるようにしていた。グループ課題は周りに迷惑をかけないようにしたいと思う気持ちからか、授業までに教材のほとんどを暗唱できるよう

に」してから授業に臨むことができていた。TURNIPは少しずつだったが、HOLEやHOUSEは積み上げ唄だったので、特にHOUSEは最後まで到達することに難しさを感じた。しかし、授業で学んだペンで叩きながら音読したり、音の連結や脱落を意識して音読することで、流れが生まれ、次の単語や文が出やすくなり覚えやすさにつながった。また、絵を見ながら暗唱することで、機械的にただ暗唱するのではなく、話の流れを理解しながら暗唱できることにつながったと感じる。暗唱では、音の強弱や連結、脱落などをリズムを通して学ぶことができた。グループ課題は、一人ではなく多数で取り組むことや教材についていろいろな話をしながら取り組むことで楽しく学べて印象に残りやす感じた。このことに加えて、声に出して、耳で聞き、目で見、ペンで叩く（動き）などたくさんの五感を働かせる学び方によって長期型の暗記や知識の深い定着ができたと感じた。

次に紹介する作文は添付資料に入っていた私の大学のときの英語修業の様子を読んだ感想を書いたものですが、なかなか個性的でユニークな寸感なので紹介したくなりました。

私は、先生の「青年教師になるまで」が一番印象に残っている。一言で言うと、今の私でもまだいけると感じた。(AYさん)

(前略) だがここでは、なぜ英語の教師になりたいと思ったのかという理由は書かれていなかったもので、どうしてなりたかったのか気がなった。(AJさん)

私が自著『英語教育が甦えるとき』から大学時代の出来事が書かれた部分を抜き刷りして添付資料に加えたのはそれで自己紹介をするつもりだったからです。授業開きでは印刷した10ページの内の2頁半を読んだだけでしたが、何人もの人がその後まで目を通してレポートに感想を書いてくれました。弱冠19歳、ちょうどみんなとおなじ年の時に、山田青年が会話の授業で聞き取りが出来ずに顔面蒼白になったり、寮友から「無知だ」と言われたりしながらも、めげずにたくましく進んで行く姿にAYさんが「私でもまだいける」と思ってくれたのならこんな嬉しいことはありません。

次にAJさんの質問について答えます。その答えは先述の本の第3章の補節2「私の英語史(続)」(全20頁)の冒頭に書かれています。「私の英語史を語るには自分の父親のことから始める必要があります。父親が中学校の英語教師をしていたからです。私が英語教師になろうとしたことについてこの影響があるのは間違いありません。親戚の人からよく「しょうちゃんはお父さんみたいに先生になるんやろ」と言われたことを覚えています。/ただ父親が学校に出かけたり家で英語教師としての仕事をしている姿は私の記憶にはありません。というのは、私が

小学校の1年生のときに病気で仕事が続けられなくなったからです。」

みんなの中にも看護師になりたいと思ったのは身近なところにその仕事をしている人がいたからという人がいるのではないのでしょうか。そんな気がしたのでAJさんの質問が印象に残りました。

最後はKRさんの作文からの抜粋です。彼女はレポートの半分を英語で書いてくれました。その一部を引用します。

“As a conclusion, it is so important to learn English with having fun, because we can not keep learning without being interested or having fun.”

私はこれに対して“I totally agree with you.”とコメントしましたが、彼女が言うように英語学習は「おもしろいな」「楽しいな」と思いながら学んでいくことが大切です。「苦行道」^{くきやうどう}「英語我苦習」^{がくしゆう}では長続きしないし、学んだ内容も脳に定着しません。苦しみながら嫌々に学んだ中身は、試験が終わった翌日には、頭から消えてしまっていることが少なくない—これは最近の学習心理学でも確かめられています。(山田2016:218-219)

そしてより多くの人がそんな気持ちを持てるように授業を進めていくのが教師の仕事だと私は思っています。

やや長くなりましたが、これで前期の総括を終わります。なお最後になりますが、授業レポートの見本として来年、後輩に紹介させてもらいたいものがいくつかあります。イニシャルか仮名にしますのでよろしく願います。

12. おわりに — 「書くこと」が深める主体的な思考

長い長い授業開きの言葉が終わった。頭の中にあるものを全て出したので私はすっかりしたが、学生たちはこの回答をどのように受け止めるだろうか。いま私は期待と不安の入り交じった気持ちでこの小論のまとめを書いている。後期の授業開きではこの「冒頭での語り」を全て印刷配布して、段落毎にリレー読みするのがいいだろうと思っている。

このような「授業レポート」は私が毎学期末にずっと書かせてきているものだが、これを読む時間はいつも私の「至福のとき」になっている。というのは、学生たちの声は授業改善に役立つだけでなく、それに励まされ元気づけられることがたびたびあるからだ。今回も私自身にとってさまざまな「発見」があって読んでいてとても楽しかった。

ただ今回のようにその記述を学生に還元して示すのは私にとってはじめての試みである。いま文科省は「アクティブ・ラーニング」ではなく「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善の推進」ということを言い出しているが、この「授業レポート」という教育方法はその実現にきわめて有効な手段になりうると私は思っている。

なぜなら、学生が授業レポートを書いて、教師がそれに答え、それを全ての学生が共有することには、学生と教師だけでなく、学生同士の対話（学び合い）も存在するからである。また、書くことは自分の思考を整理し深めることを可能にし、そのように自分の頭で主体的に考えたものが土台となった対話は自ずと深い内容をもつことになるからである。

このような実践の源流は戦前の「生活綴り方」にまで遡るのだろうが、寺島（2002：95-96）を見ると氏が定時制高校で編集した生徒会機関誌を国語の教師が授業で使ったとの記載がある。「あいつがこんなことを考えているとは思わなかった」「あいつが書けるなら、俺でも…」という具合で教材に対する関心の持ち方が全く違って来た、と氏は述べている。

また寺島（1997a：40-42）ではチャップリン「独裁者」の「表現よみ」実践を分析する視点のひとつとして「自・他の発見と自己変革」を立てている。氏はそこで「友達が表現よみをするのを見て、今まで知らなかった友達の側面を発見したり、自分で表現よみに挑戦して自信が湧いたりする。こうして「表現よみ」は個人と集団にひとつのドラマを生み出し、人間を見る眼を豊かにする」と述べている。私が今回の授業レポートにおいて行った対話とその共有においても「書くことで“自己”を発見し、共有することで“他者”を発見する」という静かなドラマが起きることを期待している。（2018/09/14）

NOTES

1. 寺島メソッドが入門期の教材として推奨する三つの「基礎教材」とは① The Big Turnip ② There's A Hole ③ The House That Jack Built である。

順に簡単な説明をすると、①はアレクセイ・トルストイの有名な民話「大きなカブ」である。「SVO」の文が繰り返して出てくる。単純なストーリーであるが、深い内容を持っている。②は「しあわせなら手をたたこう」のメロディで歌える歌で1番→2番→3番と進むにつれて「前置詞句」が後ろに伸びていくので「前置詞句による後置修飾」が学べる。③は英語の童謡「マザー・グース」のひとつである。関係代名詞 that に導かれた節が1番→2番→3番と進むにつれて、後ろにどんどん伸びていくので、「関係詞による後置修飾」の構造を学ぶことができる。

音声的には、①は韻文と散文の中間に位置づけられていてリズムはやや取りにくいだが、②③はリズムの規則性がある「リズムの等時性」を楽しく学ぶことができる。この授業では音声的な観点の「易→難」にしたがって②→③→①の順序で配列していた。

すでに6年以上英語を学んでいる大学1年生にこの「入門期」の教材を与えてどんな意味があるのかと疑問を持つ人もいると思うが、英語が苦手な学生だけでなく得意な学生にとっても「驚き」や「発見」があることは本稿で紹介してきた学生の感想文が示しているとおりである。

2. 「授業レポート」の書き方については授業開きのときに形式と内容に分けて示している。

形式に関しては「A4用紙、40字×40行、段落改行、段落冒頭1字下げ」のように指示している。

一方で、内容に関しては次のような「作文の手引き」を示している。学生は「課題一覧表」（別紙）を見て、自分がとりくんだ経験や学んだことを思い出しながらか記述していくことができる。このような「作文の手引き」の原実践は寺島（1991：42-53）にある。

＜レポートの手引き＞

課題進捗表自己チェック表の順番で書き進めていくと書きやすい。

もちろん、いちばん印象に残った課題から書き始めてもよい。

■ それぞれの課題について

1. どのように取り組んだか
2. どこで苦労したか
3. それをどのように乗り越えたか
4. どんなことを学んだか
5. 何ができるようになったか
6. 何がわかるようになったか

■ 最後のまとめとして

1. これまでに受けた授業との違い
2. それに対する自分の考え
3. 教師に対する要望
4. 添付資料を読んだ感想など。

あるいは、自分の学んだことを生かして、英語が苦手な（嫌いな）中学生に語りかけるように書いてみるのも面白いかもしれません。また、「小見出し」を付けると読みやすいレポートになります。

3. 本文では寺島（2002）の第2部を読んで後期の授業構想が一気に固まってきたと述べたが、それについて少し詳しく述べておきたい。本論でも取り上げた「英語コミュニケーション（基礎）」を受講した同じ学生が後期には引き続き私が担当する「文献購読」という授業を受けるのであるが、その授業の課題のひとつに「エッセイ・ライティング」がある。その構想の骨子、とりわけ「英訳の書かせ方」「評価のしくみ」が自分の頭の中で明確になったのである。

具体的に言うと「大前提として書きたくなるテーマを与える」「まず日本語でたっぷり書かせて枚数で評価する」「英訳は個人の力量に合わせて出来るように英文の個数で評価する」「単文で書くように指示する」「接続詞はAND、BUTだけでよいと指示する」「英文は一度他者

チェックを受ける」「教師による添削はしない」「配点の一部を教師の独断と偏見でつける」といった感じである。単純に「量」だけで採点し、「質」を見ることになる「添削」はしなくてもよいと考えるだけでずいぶん気が軽くなってくる。しかもおもしろい内容のものには独断で自由に加点できる裁量が教師に与えられている。

ただ、確かに気は楽になったが、ここから実際の配点を考えるのにはいつも悩まされる。前期では最後の授業レポートを残して全員が65~80点に到達していて学生には「他の教科で忙しい人は授業レポートはやらなくていい」と言ってあったが、そのアドバイスを忠実に実行したのは80点に達していた男子学生1人だけだった。そんなこともふまえて7割までは「確実に点数が取れる課題」、残りの3割は「意識的な努力を要する課題」というふうに得点比率を設定してみた。(これはシラバスで示したものと少し異なるところがあるので授業開きのときに提示する予定である。)

英文読解 ノーマン・カズンズ『笑いと治癒力』から3話	
記号づけテスト10回 (再試験可)	40点
ファイル提出	10点
エッセイ・ライティング	50点
・ 日本文：1枚超	10点
2枚超	15点
3枚超	20点
・ 英文：2文1点	
評価対象は50文(25点)まで	
・ 教師裁量加点	5点

書くテーマについては読んだ英文の中から印象に残った英文を引用してそこを選んだ理由を書かせるつもりである。また自分の身近な人で長寿の人がいる人はその人の生活ぶりを紹介するという項目も「作文の手引き」に加えたい。なお、この「手引き」には前期と同様に授業での取り組みの様子や教師への要望という項目も入れておくつもりである。

また最近見たテレビドラマ「健康で文化的な最低限度の生活」の第7話「笑わない才女」(2018年6月28日放映)を映像資料として見せたいと思っている。このドラマには市役所で生活保護を担当するケースワーカーが登場するが、第7話では「優秀であるが故に“できない人”の気持ちかわからず、人前で笑うのも苦手」という若い女性が挫折を乗り越えながら成長していく姿が描かれている。「笑顔で人に接する」というテーマは、今回の教材のテーマと関連するだ

けでなく、学生たちが将来就くであろう看護師という仕事とも共通するところがあるのできっと共感的に見てくれるのではないかと思っている。

REFERENCES

- 寺島隆吉 (1991) 『英語記号づけ入門—その誕生と現在の到達点』 三友社出版
- 寺島隆吉 (1997a) 『チャップリン「表現よみ」への挑戦』 あすなろ社
- 寺島隆吉 (1997b) 『キングで学ぶ英語のリズム』 あすなろ社
- 寺島隆吉 (2002) 『英語にとって評価とは何か』 あすなろ社
- 寺島隆吉、寺島美紀子 (2001) 『魔法の英語—ふしぎなくらいに英語がわかる練習帖』 あすなろ社
- 山田昇司 (2005) 『授業は発見だ』 あすなろ社
- 山田昇司 (2014) 『英語教育が甦えるとき—寺島メソッド授業革命』 明石書店
- 山田昇司 (2016、監修・寺島隆吉) 『寺島メソッド 英語アクティブラーニング』 明石書店

添付資料

1. 2018年度前期「英語コミュニケーションI (基礎)」のシラバス
2. 課題進度自己チェック表 (授業開きで配布した教材一式の2頁目)
3. 語順テスト用紙 (A-3用紙裏表) *15コマ目に実施

入学年度	2014～		テンパリング				
科目名	英語コミュニケーションⅠ(基礎)			English Communication Ⅰ (Basic Course)			
開講学年	1	開講学期	前学期	必修/選択の別	必修	単位数	1.0
履修条件等	特にありません。						
担当教員	山田 昇司		オフィスアワー	火曜日 2時～ 木曜日 昼休み			
授業の目的・概要	グローバル化が進む医療の現場にて、医療従事者と患者、そして医療従事者間における実践的な英語コミュニケーションに必要と思われる基礎的なコミュニケーションスキルの習得を目標に授業を行います。その目標を達成するために、音声に関しては「リズムの等時性」、文法に関しては「語順」に焦点をあてて授業を設計しました。授業の中で各種の小テスト、実技テスト(グループ/個人)などを何回も実施しますので定期考査は行ないません。						
到達目標	医療現場ならびに日常生活において英語で基本的なコミュニケーションがとれる。 会話力(英文を組み立てる技術)については、以下の教材でVO=OV、後置=前置の語順変換を中心に習得します。またこの教材では、音声面の基本である「強弱のリズム」も体得します。 There is a Hole. The House that Jack Built. The Big Turnip なお、看護英語の基本表現については別途配布するプリントで学びます。						
授業評価方法	<p>【筆記】個人課題</p> <p>暗写テスト(3種類) 10% (再挑戦可)</p> <p>語順テスト 10% (再挑戦可)</p> <p>看護表現テスト 10% (再挑戦可)</p> <p>授業レポート 10%</p> <p>視写 10% (≠切選れは減点)</p> <p>補助テキスト 10% (≠切選れは減点)</p> <p>【実技】グループ課題</p> <p>暗唱テスト(3種類) 30% (再挑戦可)</p> <p>プレゼン(出場・表現) 10%</p>						
教科書	最初の授業のときに、教材プリント一式を配布します。 補助テキストとして、寺島雄吉・寺島美紀子(編)、JAASET(著)『魔法の英語—不思議なくらいに英語がわかる練習帖』(あすなろ社、2001年)を用います。						
参考書	宮城寺康子ほか『看護英語の基本用語と表現』(メジカルビュー、2016年)						
授業計画	<p>1 HOL E リズムよみ 視写(相互点検)、暗唱テスト * 3時間目から冒頭で「看護表現テスト」を実施します。全10回。再試可。</p> <p>2 英検IBA実施 * 他クラスと合同で行います。教室は後日知らせます。</p> <p>3 HOL E 暗写テスト * 終了者は補助テキスト</p> <p>4 HOUSE リズムよみ、視写(相互点検) ☆HOL E 視写、≠切</p> <p>5 HOUSE リズムよみ、和訳&英訳、視写</p> <p>6 HOUSE 暗唱テスト、視写</p> <p>7 HOUSE 暗写テスト * 終了者は補助テキスト</p> <p>8 TURNIP リズムよみ、視写(相互点検) ☆HOUSE 視写、≠切</p> <p>9 TURNIP 和訳&英訳、リズムよみ、視写</p> <p>10 TURNIP 暗唱テスト、視写</p> <p>11 TURNIP 暗写テスト * 終了者は補助テキスト</p> <p>12 三つの基礎教材—暗唱・暗写 再挑戦タイム ☆TURNIP 視写、≠切</p> <p>13 和訳&英訳プリントの総復習、語順テスト、</p> <p>14 プレゼンのシナリオ作成&練習 語順テスト(再) ☆補助テキスト点検</p> <p>15 プレゼン(発表&投票)、授業レポート</p>				<p>補助テキストは、基本的には自学自習で進めてください。質問があれば授業中にしてください。締切は14時間目ですので計画的に。</p> <p>なお、これは後期「文献講読」の予習になっています。というのは、後期では英文に自分で横道記号をつけながら読解をおこなうからです。</p> <p>視写の締切はその教材が終わった次の時間です。(☆印)</p> <p>看護表現テスト、暗唱テスト、暗写テストについては、行う時間に合わせて事前に練習しておくと思います。再挑戦は随時受け付けます。</p>		

2018年度 前期 看護科 OC (基礎) 課題進捗自己チェック表

学籍番号 _____ 氏名 _____ * 各課題に10点ずつ配点。但し、暗唱は全部で30点。

<個人課題>

補助テキスト「魔法の英語」 * 締切日 14時閉日															
Lesson	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
終了日															

看護表現テスト * 何回でも再挑戦可。100÷10 (四捨五入)											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	計
得点											
											/10

語順テスト 30点÷3	
得点	本
	再

		1	2	3	4	5	計	13個 全て埋 まって 10点。
視写	HOLE							
	TURNIP							
	HOUSE							

暗写 テスト	HOLE	4~6連 (12行)	/3
	TURNIP	10~14連 (15行)	/3
	HOUSE	12連 (12行)	/4

授業レポート	1枚超5点	2枚超6点	3枚超7点	3点分は評 価者が判断
A4 40字×40行				

<グループ課題> * 暗唱テストの範囲は「段落番号までの積み上げ」。例えば、6なら「1~6」。
グループのメンバー (, , , ,)

暗唱テスト	1	2	3	4	5	6	満点5点
HOLE							

暗唱テスト	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	満点10点
TURNIP														

暗唱テスト	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	満点15点
HOUSE													

三つの教材の発表		合計	※持ち時間5分。必ずしも暗唱する必要はありません。 一種の「翻訳」のようなものと考えてください。 日本語や英語で解説を入れてもらいません。
シナリオ作成 & 出場	/5		
表現点 (投票結果で配点)	/5		

「深い対話的学び」に誘う学生レポートへの返信

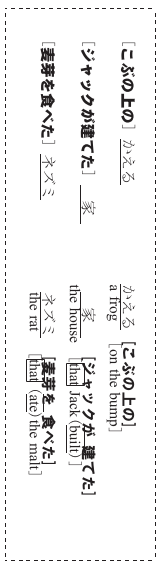
語順シート 本課題 学籍番号 _____ 氏名 _____

これまで3つの基礎教材 (HOLE, HOUSE, TURPIN) を通して英語と日本語の語順の違いを学んできました。授業で学んだ順序とは少し違いますが、TURPIN → HOLE・HOUSE の順に戻り上げて復習していきます。

最初に TURPIN で学んだことを復習します。ここでは「名詞+動詞+名詞」のように単語が並んだ英文がたくさん出てきましたね。そこで名詞をセン、動詞をエルという記号で示して、英語は「**セン・エル・セン**」一方で日本語は動詞が文末に来て「**セン・セン・エル**」、和訳すると最初のセンは「何か」、「何が」、「何が」動詞が付くことが多いのですが、中には和訳するまでもない場合があります。「セン」上へ意味を添えて、動作を行う人は誰か、あるいは誰かを対象しているものは何かを見つけてください。例えば、「引っぱり」のは「おじいさん」が、「長い」のは「脚」かどうか、といったようにです。そして、「引っぱり」のは「おじいさん」で、以下の文を英訳してみましよう。なお、文頭の単語は最初の文字を大文字に。

- そのコンビニでは 2名のアルバイトを募集しています。
the convenience store two part-timers is recruiting
- 太郎には 私から 荷物を 送っておきます。
to Taro I the parcel will send
- その仕事は 昨日 花子さんが やってくれました。
the job yesterday Hanako did
- キリンは音が長い。 → キリンについて言うと、その首は 長い状態 である。
as for a giraffe, its neck long is
- 今日はウナギだ。 → 今日は ウナギを 注文する。 *主語を補う
today grilled eel order

さて次は、HOLE と HOUSE で学んだ「**後置修飾**」を復習します。この教材では名詞を説明する言葉が後ろへ後ろへとどんどん伸びていきましたね。英語は「**後置修飾**」の一本筋ではないかもしれませんが、というのには、冠詞 a (ひとつ) や形容詞 cold (冷たい) のような修飾語の場合には名詞の前におくからです。an apple (1個のりんご)、cold water (冷たい水) では、日本語と同じ語順「**前置修飾**」です。でも、説明の言葉が少し長くなって句や節になるとセンで名詞の後ろに置きます。以下の例が示すように、HOLE では前置詞句が、HOUSE では関係詞節が、修飾される名詞の後ろに置かれています。

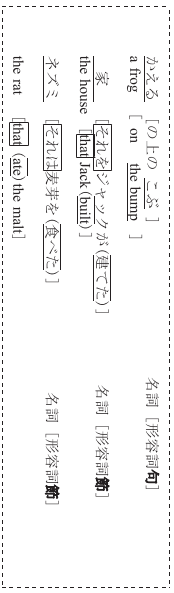


ではここで「**セン・エル・セン**」と「**後置修飾**」が混ざって出てくる英文文の練習をします。日本語のままでセンを書き行ってきたさい、付いている記号 (セン、エル、関係詞) も日本語に付しておくように。

ポイントには、修飾する言葉【】は修飾される言葉 (セン) のすぐ側に置くことです。日本語では前に、英語では直後に置きます。というのは、そうしないと、どの言葉を説明しているかが分かりにくいです。

- 私は [開日大学の] 学生 [です]。
- 【大学が始まる】 時間は [午前9時] [です]。
- これは [おじいさんが植えた] カズ [です]。
- [おじいさんの植えた] カズは [其々大きく] [なつた]。
- [隣の人が招いた] 登は [よく噛んで] [登] [上がった]。

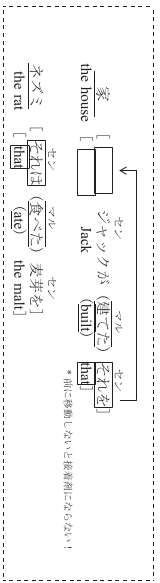
今度は【】の中のしくみの違いも見てください。前掲の枠の中の3つの例をよく見ていると、後置された語句に【】があるか否かで【】内にある接着剤が異なっています。



【】の中で動詞がないときの接着剤は「**前置詞**」と呼ばれます。名詞「the bump」の前には置く言葉 (副) だからです。(日本語の助詞は「**後置詞**」になります。)

一方で、【】の中には□があるときの接着剤は「**関係代名詞**」と呼ばれています。というのは、この **that** は前の名詞 (先行詞) と後ろの文を関係づけで直前の名詞の代わりを指しているからです。(日本語にはこの「**関係代名詞**」はなく、接着剤の役目は動詞や助詞などの「**連体形**」が行っています。)

ここで【】の中に **that** がある2つの文を見比べてみましょう。すると文中にある **that** の働きが異なっていることがわかります。以下のように、【】の中を示す次の、つまり「**セン・エル・セン**」に戻してみるとその違いがよくわかります。



元の文に戻してみると、前者の **that** は「**目的格**」、つまり動作の対象を表していて、後者の **that** は「**主格**」、つまり動作主、すなわち行動者を示していることが分かります。また、後者を **B** 型とすると、次の日本語は **A** 型、**B** 型のどちらになるでしょうか。分からないときは元の文に戻って考えてみるとうかがいます。

